

# 万太郎谷・川棚沢 2015/10/18

メンバー：齋藤（CL）、落合（SL・記録）、飯野

吾策像前 6:05 川棚沢出合 7:40 大スラブ 13:00 川棚の頭 15:10 吾策像前 17:10

天候：晴れのち曇り

川棚沢に興味を抱いたのは同じく万太郎谷の支流・井戸小屋沢に登った時、ほんの2カ月前の話だが対岸に見えたスラブが印象的だった。

前夜は土樽SBで定番の祝杯、いつもより早くはじめてしまったせいか案の定深酒してしまい、翌日は二日酔い気味で出発となる。（日本酒のボトル・キープは危ないので止めておこう）

川棚沢出合までのアプローチは1時間30分程度、酒が抜けるにはちょうどいい運動だ。

本谷の紅葉は見頃で夏とはまた違った雰囲気だが、川棚沢出合は関越道の排気塔があり間違えようがない。

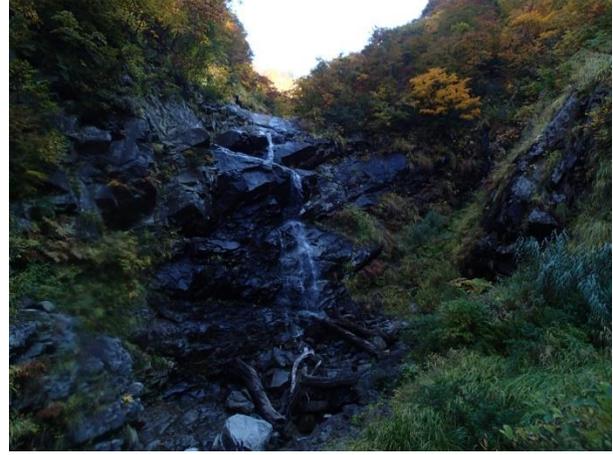
水量乏しくあまりにショボい出合なので普通ならこんなところ入る気がしない、下部はV字谷で暗い印象を受ける。出だしから源頭のような雰囲気だが、最初や最後の1・2手が悪い小滝が多く、お助け紐を多用しながら越えていく。時期的な問題なのか水みちでない所も濡れている岩が多く全体的にヌメっているので気が抜けない。

高巻きは兩岸とも傾斜が強いスラブの草付で右岸はほぼ垂直で左岸をだまだまし登る感じだが、染み出しが多くグズグズで踏み後も無いので結構悪かった。

出合から2〜3時間程度進んで振り返ってみると、排気塔がまだ近い。

「いやあ〜進んでないねえ、今日は長い一日になりそうかなあ。」冗談を交わしながら半分そう確信していたが、「山の絶景は溪にあり」といった感じで紅葉は絶頂である。

この溪最大の40m滝は2ピッチで齋藤〜落合でリード。核心は1ピッチ目の乗越（IV級+）ランナウトする上、ハーケンが中々決められず渋めの登攀となる。上部は水流を横断し再びハーケンを打ちA1で突破した。登山大系には右のルンゼを登ると書いてあったがこちらは相当悪そうにみえた。



下部は高巻きも悪く小滝とはいえヌメッていて一手がヤラしい（左）、40m 滝（右）



40m 滝の核心（左）、上部では万太郎谷・井戸小屋沢と常に対峙する（右）

次はおのずと向こう側の溪が気になるのは納得だ。

中間部になるとようやくスラブが開け明るい雰囲気、仙ノ倉谷などと比べてしまうとスケールこそ小さいが谷川らしい明るい雰囲気、前衛の頭で距離も短い溪だが十分価値ある内容だ。

上部になるとさらに枝沢が何本か入り、最初に見える大スラブは高巻きも出来なような急峻なスラブで我々は二本目のスラブに突入。

しかし入り口はヤブに埋まって溷れているので分かりづらく通り過ぎてしまうところだった、上部のツメ方次第でコースタイムも内容も変わると思われる。

記録が少ない沢の場合、こういう所からのルート・ファインディングはセンスが問われるだろう。

我々にセンスがあったかどうかは下記の文章からご想像にお任せする。。

最初に見えた左の大スラブも気になるが果たしてあそこは突破出来るのだろうか。情報が少ない分ルート取りにはいつも以上に慎重になるが、探検的要素は高い。



錦秋の川棚沢



上部は下部のヌメヌメ岩とは全く違いフリクションもバッチリ決まる快適なスラブ登攀が続く。

登るにつれて傾斜も強く高度感も出てくる、振り返ると万太郎山（谷）が目を惹くが、冷静に見ると落ちたら数百メートルは吹っ飛びそうな高度なのでルート取りに注意しながら登る。スラブとは言えど要所にテラスがあるので一息付きながら慎重に進んでいく。

出来れば川棚の頭より左の登山道に出た方がヤブ漕ぎも最小限に収まると思っていたが、スラブは左に進むにつれ垂直になり、フリーで登るのにはあまりに危険なので右側のブッシュを繋いで最後はテールリッジのような雰囲気のスラブを越えて藪に入った。上部は沢というよりはスラブの登攀なのでフェルトよりラバーソールの方が気持ちよく登れる。

稜線の登山者とは指呼の間であるが、我々は頭に続く正規の尾根に乗ってしまいどんどん右に追いやられて最後は目線より上の密藪を1時間弱しっかり漕いで川棚の頭に到着。。

予定通りとは行かなかったが、川棚の頭に忠実にツメたという意味ではいいラインで登ったということにしておこう。。

帰り道は矢場の頭から自分たちが遡って来た溪が一望出来て、登山道から見るとよくあんなスラブ登ってたなあと満足感に浸る。最後は茂倉新道を一時間弱でブチぎって何とか日没前に下山した。

次に遡りたい溪も枚挙に暇がないのが谷川であるが、川棚沢は前衛の近くて良い沢であってもなかなか侮れない沢でした。

今シーズンはゴルジュに泳ぎ・スラブに登攀・釣りに焚火に飲み会？とたくさんの山行をこなしたが、そのほとんどに同行してくれた沢1年目の飯野さんも最後はだいぶ手慣れた様子ですっかり沢の虜になってしまったようだ。新人の高いモチベーションも我々のひとつの強みだった。

今年は合宿をはじめ、個々の技能レベルだけではなくパーティー全体の総合力も底上げ出来たし課題もたくさん見えた。

沢登りは総合力とはよく言ったものだが、山ヤとして走・攻・守揃ったトリプル・スリーはなかなかいない。そりゃ何でも出来たに越したことはないが、苦手な分野はパーティーで補えばいいだけである。

結局のところ会心の山行とは何かと考えると、それはルートの内容や登攀価値以上にパーティーの自己意識や強い思い入れ、(旨い酒が飲めたか！？など) どのような形で登り総括したかの方が印象深く、シーズンを振り返ってみるとそんなことが頭をよぎるしそれに尽きるのだと思う。

今シーズンはそんな一体感のある沢登りがたくさん出来て仲間に感謝、これにて草履納めとなった。